

シニアの落語、味な笑い 「暗記し、人前で語る」効果、専門家が注目



落語の稽古に励む齊藤文彦さん＝東京都文京区

高齢のアマチュア落語家たちが、東京都内で開かれる「シニア社会人落語会」に向け、稽古に励んでいる。出演者10人の平均年齢は72歳。豊富な人生経験からにじみ出る人間味やユニークな演出が特徴だ。老年医学の専門家は落語の効果に注目している。

■81歳「芸歴」11年、長ぜりふに挑む

出演者の中で最高齢の齊藤文彦さん(81)が今月初め、東京都内で稽古をしていた。真正亭駒彦(しんしょうていこまひこ)の名で上演するのは古典落語「牛ほめ」だ。プロの落語家、金原亭馬治(きんげんていうまじ)師匠の指導を受け、新築祝いの口上を覚えられない与太郎を表情豊かに演じる。落語を学ぶ人のグループ「馬笑(ばしょう)会」の仲間から笑いがもれる。

齊藤さんが落語教室に通い始めたのは70歳のときだ。大学時代にラジオで聞いていたが、卒業後は「仕事一筋」だった。65歳で寝具の販売会社社長を引退し、旅行などを楽しんでいたとき、高校時代の同級生が認知症になった。思えば、亡き母が認知症になったのも70歳のころ。「自分が笑い、人も笑わせ、長いせりふを覚える落語は、ぼけ防止にいいのでは」と思った。

暗記は簡単にはいかない。師匠の落語を録音して帰り、パソコンで書き出したものを読んで覚える。家族に気兼ねせず大きな声を出せるよう、音楽スタジオで約2時間。聞き慣れない言葉に苦労するが、暗記できる噺(はなし)の長さは当初の15分から倍近くに延びた。

がんの後遺症で5年ほど前から腰が曲がり、歩きづらくなった。高座で25分を過ぎると姿勢を保つのも難しい。だが「どっとうけた時の観客との一体感が気持ちいい。年をとっても元気に舞台に立つ姿を見てもらい、笑いとお腹を届けたい」と話す。

■72歳、悪徳商法ネタに

大手電機メーカーの元社員で、消費生活アドバイザーの柴崎堯(たかし)さん(72)の十八番は悪徳商法の手口や解決法を落語にした「消費者啓発落語」だ。実話を基に台本を書き、消費生活講座などで披露する。続く講演でトラブルを防ぐ方法などを話す。今回は社繁亭倍蔵(しゃはんていばいぞう)という名で、靈感商法を扱った創作落語「おどしの変わり玉」を予定する。



宴会芸として始めて51年。公演は500回を超え、任意団体「全日本社会人落語協会」(東京)の大会で準優勝した。「1本でも多くの台本を書き、いろんな切り口があることを知ってもらいたい」

出演者のうち、2人が女性だ。大空メイの名で活動する女性(74)は、自作パネルに絵を貼ったりはがしたりして展開する「パネルシアター落語」を考案。古典落語の登場人物を政治家や有名人に置き換え、風刺をまぶす。航空会社に客室乗務員として勤め、26歳で結婚退社。子育ての傍ら英語を教えてきて、63歳のとき、大学時代に聞いた落語を始めた。米国など海外の小学校でも上演した。今回の演目は「饅頭(まんじゅう)こわい」だ。



落語会はNPO法人「シニア大楽(だいがく)」が初めて開く。理事長の藤井敬三さん(75)は、出演者をシニアに限定した会は全国でも珍しいという。「高齢者の落語には、人生経験を積んだ味がある」。2回目の落語会は来年4月、募集を全国に広げて開く予定だ。

今回の落語会は17日午後1時から、東京都の文京シビック・小ホールで開く。木戸銭千円。チケットの申し込みは名前、住所、連絡先、枚数を書き、ファクス(03・3251・3957)かメール(senior-daigaku@joy.ocn.ne.jp)でシニア大楽(03・3251・3955)へ。

■「認知機能低下、抑える可能性」

東京都健康長寿医療センター研究所の藤原佳典研究部長(老年医学)が絵本の読み聞かせ講座を使って調べたところ、講座を受けた高齢者は、受けていない高齢者に比べ、記憶力が向上した。「同じように語るだけでなく、暗記もする落語は認知機能の低下を抑える可能性が大きい。繰り返し練習すればより効果的だろう。落語会でやる気も上がる」と話す。

(森本美紀)